

例年は冬場に流行するマイコプラズマ肺炎の感染者数が、小学生や乳幼児中心に今年の夏は増えた。せきを介してうつるため、新学期が始まった九月以降も感染が広がる可能性があるという。手洗いやうがいなどの徹底で予防することも、せきや熱が長引く場合は専門医に診てもらおう。

マイコプラズマ肺炎が急増

うになる。

国立感染症研究所の調べによると、全国約四百カ所の指定医療機関からの発生報告件数は八月七—十三日(第三十二週)で百九十六件。二〇〇四年、〇五年の同時期の一・八一・三倍で、冬のもも多かった週とほぼ同水準になっているという。

病人や高齢者も

報告件数が増えている背景には簡便な診断キットが今年から全国の医療機関に本格的に普及し、これまで見落としていた症例が報告されるようになったとの見方もあるが、詳しいことは分かっていない。

感染研細菌第二部の荒川宣親部長によれば「ここ数年、治療薬のマクロライドが効きにくいタイプのマイコプラズマが出てきた。感染者数増加の原因だとは現段階ではまだ言えないが、今後、動向を注視する必要がある」という。

マイコプラズマ肺炎はマイコプラズマと呼ぶ微生物が病原体。主に幼稚園から小学校までの子供

邪風夏長く引く 見逃さない

マイコプラズマは細菌の仲間だが、細胞壁をもたない。このためほかの細菌によく効くといわれるペニシリンなど抗菌薬が役立たない。風邪と思いで服薬を続けても症状がなかなか改善しない。飛沫(ひまつ)感染

せき介し、子供に感染

そのため、家族内や職場、学校などで感染が広がる

秋から冬に注意

マイコプラズマ肺炎と気がずかずに放っておくと肺などに水がたまる胸水貯留を引き起こすなど重症化する恐れもある。「命を落とすことはほとんどないが、一カ月ほどの入院を強いられる場合もある(荒川部長)」という。

感染すると、のどの粘膜でマイコプラズマが増殖する。二—三週間の潜伏期間を経て、セ氏三十七—三十八度の発熱、頭痛、全身倦怠(けんたい)の初期症状が表れる。その数日後からたんを伴わない乾いたせきをするようになる。

マイコプラズマ肺炎に詳しいJ.R札幌鉄道病院

◆マイコプラズマ肺炎の症状の経過

【感染から2—3週間後に発症】

- ・37—38度の発熱
- ・頭痛
- ・全身倦怠(けんたい)

【発症後3—5日後】

- ・たんを伴わない乾いたせき
- ・耳の痛み
- ・胸の痛み

【その後、重症化した場合】

- ・胸水貯留(1カ月ほどの入院が必要な場合も)

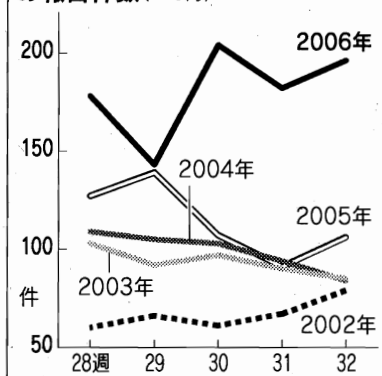
【合併症】

- ・中耳炎、脳炎、肝炎、心筋炎など

小児科の成田光生医長は、マクロライドの服薬を勧める。マイコプラズマに感染し肺炎が起きるのには、体が菌に過剰に反応する免疫異常が原因と考えられている。「マクロライドは菌の殺菌と

また、風邪に似た症状が長く続く、周囲にも同じような症状を示す人がいる場合は、早めに小児科など専門医に診てもらおう。

マイコプラズマ肺炎の過去5年間の報告件数(7-8月)



(注)28週から32週はその年の7月初旬から8月中旬にあたる(国立感染症研究所のデータをもとに作成)

体のツグナル

霰粒腫

社員の男性Aさん(32)は、テニスに興味で、使い捨てのソフトコンタクトレンズを使用して試合に出ている。数日前より右の上のまぶたが重い感じがして、鏡でみると腫れていることが分かった。指で腫れた部分にさわってみると、コロコロしたもの(腫隆)に触れるが、痛みはなかった。近くの眼科医を受診したところ、ものもらい(麦粒腫)だといわれ、目薬を処方された。

しかし、一週間きちんと点眼しても腫隆が一向に小さくならなかった。心配になり総合病院眼科を受診した。精査の結果、霰粒腫(さんりゅう)

膿排開切に 効きやすくなる

しゅ)をしちないよ霰粒腫(さんりゅう)は、目の奥に発生する炎症性疾患で、大きくなる傾向がある。目薬だけでは治りにくいため、手術が必要になる場合がある。手術は、局所麻酔で行われ、約10分程度で完了する。手術後は、数日間は目を休ませることが大切である。